

「人のわざが終わる時」

ルカによる福音書 2章 22節～35節

説 教 久保田拓志伝道師

シメオンという人物は、「正しい人」「信仰深い人」であり、聖霊が彼に宿っていたといえます。さらに、主が遣わす救い主に会うまでは、死ぬことはないと言った聖霊から示しを受けていたというのであります。彼は、聖霊の約束を信じて、じっとエルサレムで待ち続けていたのです。そして、彼が、御霊に感じて宮に入ったとき、イエスを抱いたマリアとヨセフとに出会いました。そして、幼子イエスを抱き上げ、シメオンは歌いました。

聖書はこうも語っています。シメオンはイスラエルの慰められるのを待ち望んでいたと。神の言葉が、聴く者の慰めとなると、シメオンがそうであったように聖霊が、私たちと共にいてくださるのです。神の御言葉を聴くという行為は、助け主を呼ぶことでもあります。神様にむかって「助けてください！」と叫ぶとき、すでに慰め主は、わたしたちのすぐそばにいられています。

イエス様は弟子たちをごらんになりながら、こう祝福されました。「悲しむ者は幸いです。その人は慰められる。」(マタイによる福音書5章4節)この悲しむというのは、ただ、自分の身におきたことが悲しいということではありません。宗教改革者ルターは、この箇所を、悲しみを担うものは幸いですと訳しました。

シメオンが、「正しい人」「信仰深い人」「イスラエルの慰められるのを待ち望む人」と呼ばれていたのは、イスラエルという国の悲しみを自分の悲しみとして担っていたからです。祭司でも律法学者でもない、一人の信仰者がイスラエルの悲しみを担って祈り続け、救い主に出会うことを待ち望んでいた。いつしかこの人物は老シメオンと呼ばれるようになりました。

幼子イエス・キリストを中心に、シメオンとマリアそしてヨセフは、聖霊の導きによって神殿で会うことが赦されました。イエス・キリストを中心に、聖霊の導きによって集うことが赦された交わり。これは、私たちの教会の交わりそのものではないでしょうか。そして、教会の交わりの中で、最も大切な交わりが、この礼拝であります。共に、同じ信仰告白を告白し、同じ御言葉を聴き、讃美の歌声を共にあげる。この救いは、万民の前に備えられたもの、異邦人を照らす啓示の光であります。すべての人々に与えられている救いを喜び合う時、それがこの礼拝です。

しかしシメオンは、こうして神をほめたたえた後、マリアにこう告げました。あなた自身も剣で胸を刺し貫かれるでしょうと。聖書は、この時のマリアの反応について何も語っていません。いや、語る必要はなかったのではないかと思います。天使ガブリエルにより、救い主を身ごもったことを告げられた時の応え「わたしは、主のはしためです。お言葉どおりこの身になりますように」というマリアの応えがすべてであったと思うのです。そして十字架の下で、愛する我が子の最期を見届けながら、「わたしは、主のはしためです。お言葉どおりこの身になりますように」と叫びにも似た祈りを捧げていたのではないのでしょうか。マリアもまた、神様の召しによって「悲しみを担う者」とされたのです。

生まれたばかりの幼子を腕に抱きながら、シメオンとマリアとは、すべての人に成就する神の救いのご計画に、集中していたのであります。この幼子はイスラエルの多くの人を倒れさせたり立ち上がらせたりするために、また、反対を受けるしるしとして、定められています、とシメオンは告げます。イエス・キリストの十字架の前で、イエスに反対をし、イエスを殺そうとまでする、私たち人間の罪の姿が明らかにされるのです。しかし、十字架上のイエス様は、それでもなお私たちの罪の赦しを父なる神に祈り求めてくださっているのであります。この慰め、愛の力、力の前に、人は降参するしかない、倒れるよりほかない、ひれ伏すよりほかない、そして、ただひれ伏すのではなくて、復活のイエス・キリストから再び立ち上がる力を新たな命をいただくのであります。

主イエス・キリストとの出会いは、その両腕に神の独り子をかき抱く出会いです。その重さ、そのぬくもり、そこから伝わってくる命の鼓動。主イエス・キリストを、私たちもまた両腕に抱きしめながら、心からの感謝の思いをもって「主よ今こそあなたはみ言葉どおりにこの僕を安らかに去らせてくださいます。わたしの目が今、あなたの救いを見たのですから」と、この一年の終わりにあたり、共に祈りたいと願います。

(記 久保田拓志)